

## 『篁物語』の総合的研究 (2)

中村 一夫 (日本語学・文学科)  
松野 彩 (日本文学・文学科)  
仁藤 智子 (歴史学・史学地理学科)

### 〈経緯と現状〉

2016年春以降、平安時代を学ぶものとして、実在の人物をモチーフに物語として後世まで語り継がれている文学作品（虚構物語）を取り上げて、研鑽を積み重ねてきている。主に写本間の異同の分析を通じたテキスト研究と本文校訂、それに基づいた解釈、関係する歴史史料の収集と考察、当該期の社会情勢や人物関係などの解明を行っている。現在は、『篁物語』を継続中であるが、今後は他の作品も取り上げて比較検討していきたい。

### 〈題材〉

『篁物語』とは、平安時代実在の人物である小野篁(802～852)を主人公とした歌物語である。成立は未詳で、平安中期から鎌倉室町期まで、さまざまな説がある。現存する伝本は、江戸時代初期より遡らないとされる書陵部本、彰考館甲本、同乙本(原本焼失、転写本が残る)の三本と、鎌倉時代後期に書写されたと考えられる承空本である。近年、承空本が『冷泉家時雨亭叢書』に収載されたことで、この作品の成立年代と伝本、本文の研究に新たな展開が見られるようになった。

### 〈成果と課題〉

今年度の成果の一部は、各自の小論に譲ることにしたいが、概略を述べる。

中村は、日本語学の立場から、昨年度は主に漢字の使用状況を調査し、『篁物語』の四本の伝本の本文のありようとそれらの相対的な関係性を探り、新出の承空本と書陵部本の近い関係を明確にした。また彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループに分類することが適当であることを指摘した。今年度は、最も書写年代の古い承空本による校訂本文の作成を試みた。『篁物語』は主に江戸初期に書写された『篁物語』枅形本(彰考館蔵・甲本)によって読まれてきた。『日本古典文学大系』(岩波書店)に所収のものをはじめ、これまでに公刊された各種の校注本や校本の類も、同本を底本として本文が立てられている。しかしながら、新資料として公開された承空本はそれよりも早く鎌倉時代に写されたものであり、両者は近い本文を有するものの、なお細部には検討すべき相違点が存在する。そこで承空本の読解や調査に裨益するものとすべく、この伝本を底本とする校訂本文の作成を試みた。あわせて前稿で扱えなかった語種と表記について

の考察を行い、先に指摘した諸点を裏付ける結果を得た。

松野は、中古文学の立場から、注釈書の本文・注釈書を丹念に比較し、新たな本文校訂・解釈の可能性を見いだそうとしている。また、同時に成立時期についても検討を行っている。『篁物語』の成立時期については多くの説があるが、定説がない状況にある。昨年度は「角筆」に着目し、その用例から『篁物語』の成立時期を平安後期の11世紀末以降であることを検証した。今年度は「搔練」に注目して検討を行い、用例調査から平安末期の12世紀末までが妥当であるという結果を得た。したがって、この2年間の研究成果によると、『篁物語』の成立時期は平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間ということになる。ただし、『篁物語』の主人公のモデルとなった小野篁は平安前期の人物であり、作品中には平安前期・中期の要素も見られるため、今後も調査を継続し、慎重に成立時期を特定していくべきであると考えている状況である。

仁藤は、歴史学の立場から、昨年度は六国史をはじめとする史料に散見する篁関係記事を整理し、遣唐使乗船拒否事件や僧善愷訴訟事件など数多くのエピソードの中から、平安時代の学識豊かな官人として、二人の東宮・恒貞と道康に学士として仕えた篁の姿を明らかにした。今年度は、平安期に人々を魅了した社寺参詣が物語に与えた影響を注視しながら、『篁物語』の舞台に「稻荷詣」が選ばれたこととその時代性について解き明かそうとした。稻荷（神）社は、9世紀半ばに淳和天皇に崇った「樹」として突如史料に現れる。その後朝廷の崇拝を受けるようになるが、人々の参詣の対象となるのは11世紀以降で、平安京に住む都市民の祭礼として稻荷祭が挙行されるようになる。こういった歴史的背景から『篁物語』のこの段の成立時期も11世紀以降といえ、松野の研究成果と矛盾しない。

研究を進めていくうえで、いくつかの解明すべき課題も明らかになってきた。

第一に、承空本といわれる大量の歌集を筆写した承空についてである。鎌倉時代の有力御家人宇都宮頼綱の孫で、法然の高弟証空に師事したことは知られていたが、どのような事情で、一介の僧が大量の歌集の筆写をすることになったのか。その事情を宇都宮歌壇と京都歌壇との交流も考えながら、解明するべきである。

第二に、承空本のカタカナ表記である。他の3本は漢字平仮名混じりで書かれているが、承空本だけ漢字片仮名混じりの表記法がとられている。写本の歴史的な位置付けとともに、その理由や背景を考察していかなければならない。

第三に、『篁物語』の第一部が『古今和歌集』の一首、第二部が『本朝文粹』の篁の求婚詩（漢文）からモチーフを得ていることは周知の事実であるが、物語のそれぞれの部分の成立過程に時間差があったと考えられる。

最終的には、小野篁に仮託して、どのように『篁物語』が成立し、今日の形に落ち着いて伝来してきたのか、明らかにすることを目的としたい。